2014年 3月発行（年4回　3,6,9,12月発行）通巻 109号

子どもたちの明日

Children, Our Future

2014 年 3 月
109 号

目次

- プノンペン便り　CYK 手織り布ショップ「ピダン・クメール」が目指す道　1頁
- 支援の現場、カンボジアで考えたこと / CYR スタディーツアーで得たもの　2頁
- 活動支援　若い世代の応援　3頁
- 宮城県多賀城市　おおぞら保育園「デッキの遊び場ができた!」　4頁

ピダン・クメールのオープニングで織物の品定めをするお客

1

プノンペン便り

CYK手織り布ショップ「ピダン・クメール」が目指す道

ピダン・クメールは、昨年４月移転した幼い難民を考える会カンボジア事務所が階下に開いた店で、プノンペン市中心街にあります。開店記念６月のイベントでは、ソピアリット・シヨン氏（国立文化芸術大学講師）による講演を通して、ピダン (仏像の天蓋絹絵絣) 伝承について考え、ピダン・クメールが担う織物事業の役割を、参加者に伝えました。

役割とは、カンボジアが誇りとしてきた絹絣織りの伝統を復活させ、織り技術を学んだ女性が販売収入で暮らせるよう、さらには、織物研修センターの運営自体を販売収益でまかなうことです。ピダン・クメールの顧客は外国人、ことに旅行者が多いので、ホテルやレストランでの宣伝に力を入れ、目を惹くリーフレットやチラシを配っています。また、製品の生産・販売・在庫それぞれの管理面で一貫していなかった点を改めたり、店は毎夜７時まで客の対応に当たるなどしてきました。その結果、今年１月末までの販売実績は、前年度比で 1.6 倍になりました。これは中心地への店の移転と宣伝効果、それに製品への高い評価の現れと受け止めています。

一方、織物研修センターでは品質を高めようと、草木染の新しい色づくりや、色褪せしない藍染め法、日本向け帯地の染めや織りの工夫など、新たな可能性を開拓しています。現在、プノンペンで開催中の国立カンボジア博物館主催「甦るクメールの至宝、ピダン展」には、研修センターで織られた秀作 14 点が展示されています。にも拘わらず、センター自主運営の前途は明るくありません。激しさを増す社会環境の変化が、技術習得で約束されるはずの自活を危うくしているからです。若い女性の多くは、出稼ぎで村を離れたり、外国企業による縫製工場で現金収入をすぐ得られる道を選んでいます。織物産地で知られたタケオ州も例外ではなく、研修センター近くの村に工場ができました。

日本からの応援

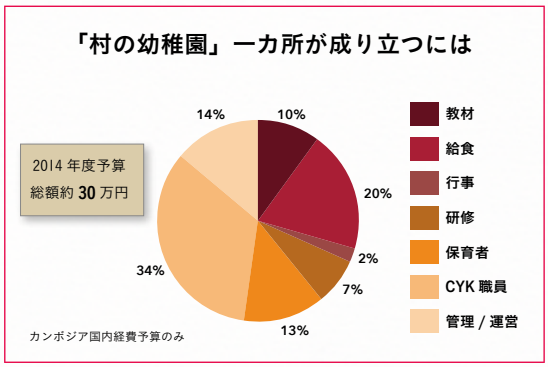
これらの厳しい状況を打開したいと、日本国内でも積極的な販売活動を始めました。去年は、熱心な支援者・ボランティアの尽力で、ピダン・クメール姉妹店のラタナはもちろん、明治寺、阪急うめだ本店でのピダン展、正光院、東慶寺の展示即売が実現しました。織物工程がわかる DVD 上映を通じ、美しい草木染の色や精緻な絹絵絣ピダンの魅力を伝える努力もしました。今後は、委託販売の道を広げ、さらに多くの支援者と共に、機織技術の維持と織り手の自活への道を確保していきます。

2 支援の現場、カンボジアで考えたこと

昨年 11 月、CYR ボランティアのグループがカンボジアを訪れました。支援先 4 ヵ所の保育所で、いつも目に止まったのは、「みんなで布チョッキン」支援で見慣れた縫いぐるみの人形やボール、そして学生ボランティアが手がけた翻訳絵本でした。ボランティアの手を経て届けられた遊具や教材の数々。どれもが確かに使われている光景に接して、私たち自身が子どもたちの日々につながっているという実感がありました。

保育所の効果と運営の費用

子どもたちが遊び、ともに過ごす時間を持つことは幼児教育の根底です。安心して子どもを送り出せる場所があり、子どもの学んだことが家庭に反映されるのは親の喜びです。保健衛生面では、保育所が社会生活改善の一端を担っていることもわかりました。働く若い保母さんたちの頑張りには頼もしいものを感じました。痛感したのは、保育事業を推進するには物による支援だけでなく、資金援助の大切さです。保育所の運営には、右の円グラフが示すようにさまざまな費用がかかります。保育者の安定した待遇はもちろんのこと、経済的な余裕がなかったり、保育経験が足りない人には研修に参加できる機会を増やすことはさらに大切です。一方、あるべき幼児教育の実践を求めて、保育活動を続けようと奔走するスタッフの努力には、頭の下がる思いがあります。



機織り技術に磨きをかける

タケオ州にある織物研修センターでは嬉しい場面に出会いました。一つは、昨年完成した藍染めの布、そして日本からの発注で製作が進む帯地の機織りです。日本人の感覚を理解し、繊細な色合いで文様を織り上げるのはさぞ難しいことかと察します。でもこの仕事をこなせば、今後は伝統的な柄以外の要望にも応えられるすぐれた技術が身につくことでしょう。 将来につながる明るさを感じながら、センターを後にしました。

奥山　直子
教育を受けられない子どもへの支援を続けて 7 年目のボランティア。

3 CYR スタディーツアーで得たもの

私がカンボジア渡航の決意をしたのは、単に子どもたちへの支援や、アンコールワットの景観に惹かれたからではありません。むしろ、繰り返しが続く毎日に退屈し、周りに流され甘えて暮らす自分を変えたかったからです。カンボジアでは私の想像を越えるショックが多かった反面、その体験を通して、以前は全く気づかなかったことをたくさん見つけました。それらは大変貴重な時間であり、人生で最も大切な財産になりました。

新たな自己の視点

今ある生活が当り前と思い込み、刺激のない毎日を送ってきた私に比べると、カンボジアの人たちははるかに心豊かに人生を楽しんでいました。プノンペン周辺の農村家庭では、集めたペットボトルや鉄屑を売って夕食費にするその日暮らしでした。ガスや水道設備はなく、剥がれ落ちた屋根の下に住んで不満もこぼさず、私たちを笑顔で迎え入れてくださいました。あの人たちが私たちの生活環境を見たらどう思うでしょう。日本に帰ってきて一番考えさせられたことは、私たちの心の貧しさです。世界有数の経済大国であり、恵まれた環境に暮らしながら、私たちはその日の天気にさえ不満をいいます。心の貧しさはどれほどの富でも埋めることはできません。安定した暮らしのために働くことは大切ですが、身体を休ませ心を充実させることにも目を向けたいと感じました。そうすれば小さくとも大切な事にも気づき、より良い世界を創ることができるのではないでしょうか。

先進国に生まれてこそできること、しなければならないことがあります。これからは、子どもたちが育つカンボジアの社会環境がさらに良くなるよう、人びとが自立して働けるような支援をしていきたいと思っています。

大杉　早希子
大学生、CYR あいち会員。
将来の夢はアジアの発展途上国支援の仕事。

4 活動支援　若い世代の応援

ネット媒体広報、「子どもたちの明日」やイベント案内のデザイン

私たちは、主にネット媒体を使った広報活動に取り組んでいます。

Facebook ページでは、カンボジアの文化の紹介や、CYR の活動の宣伝をしています。

最近は Twitter を始めて、若い世代に私たちの活動について知ってもらおうと作業を始めました。また、ニュースレターについては、昨年より一ボランティアとして、CYR 広報の一層の充実を目指し、「子どもたちの明日」をリニューアルしました。イベント案内のチラシ作成にも協力しています。今後も事務局・ボランティアの方々と協力しながら、より魅力的な紙面づくりに努めていきます。

まずは本会の活動について少しでも多くの方に知って頂き、興味を持って頂くことから支援が始まると考えるので、これからも積極的に広報活動に取り組んでいきたいと思います。

大学生
川合菜友、吉田三咲、松下旦、伊藤水音

絵本７冊、カンボジア語に翻訳

カンボジアの村やスラムの保育所には、絵本や人形を手にしたことがない子どもがたくさんいます。そんな子どもたちに贈りたいと、カンボジア語を学ぶ大学生６名が絵本を翻訳しました。選ばれた７冊は日本の作家による福音館書店刊行の本で、幼い難民を考える会が国際ボランティア貯金の助成で出版しました。配布された 500 部の絵本は、昨年 10 月から保育者研修（写真は 10 月のタケオ州研修で）に使われ、公立地域幼稚園、保育所の子どもたちの間では大人気です。翻訳を手がけた学生たちはつぎのように語っています。「絵本はとてもかわいらしく、たくさんの方の力があって生まれた宝物です」「学生の私たちに素晴らしい機会を作っていただいて感謝しています」「翻訳絵本をカンボジアの子どもたちに読んでもらえるのは、一生の誇り。いつか現地の子どもたちに読み聞かせできるよう励みます。」

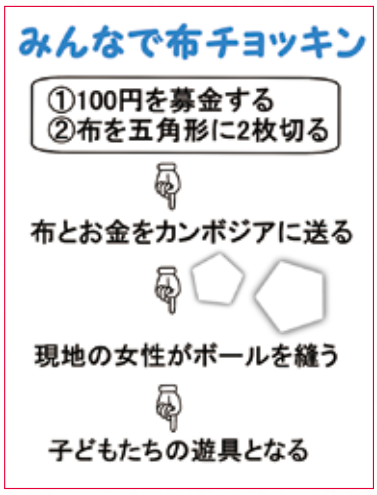
大学生
伊藤水音、伊東香南、田中永都　他３名

わかりやすい「みんなで布チョッキン」手順図の紹介

前号で慶應高校生徒たちが、文化祭でカンボジア研究の結果を発表したとお伝えしました。発表の折、同校３年生の TN 君が、布集めから、現地に送られた布が縫い上がるまでの仕組みを来場者に伝えるために、右のような図を用意しました。これは端切れ布と募金が、スラム保育所の親たちの針仕事収入や保育者研修費用に充てられ、布ボールや人形が遊具になるまでを示す図です。 研究メンバーは、研究と支援活動の成果を確かめるため、２月にスタディツアーとしてカンボジアを訪問してきました。

右図：みんなで布チョッキン作業の手順図

高校生
TN



5 宮城県多賀城市
おおぞら保育園「デッキの遊び場ができた！」

「子どもたちの明日」107 号で報告したトレラーハウスの保育園に、屋根つきのデッキが完成しました。園長、黒川恵子さんが寄せた経過報告の一部です。

ちょうど３年前のことでした

ふだんは静かな昼寝時間の保育室が、突然の大地震で一変してしまいました。怯えて泣く小さい子たちをベビーカーに集め、配達で立ち寄った郵便屋さんと一緒に、揺れる台車を抑えるのがやっとでした。連絡がつかない保護者の子どもたち 17 人を避難させなければなりません。その日は寒く、避難所の多賀城小学校への川沿いの道には小雪が舞っていました。子どもたちに布団を被せ、やっと校庭にたどり着くと、すでに校庭の隅にも真っ黒い津波が押し寄せていました。慌てて三階の図書室に駆け上がった時の動揺と混乱はことばにはなりません。

夜になり、園児と数名のおとなは、ローソクの灯りで手持ちの食べ物を分け、空腹をしのぎました。誰もが心細く、家族や連絡の取れない人や子どもへの心配と刻々迫る津波の危険で頭がいっぱいでした。これまで体験したことがない衝撃と苦悩の日の始まりでした。

トレラーハウス利用の保育園

破壊と喪失の日から数ヶ月後、仕事を持つ親たちの力になりたいと、震災で廃園にされた保育所に代わる保育を「おおぞら保育園」として始めることにしました。しかし激しい破壊の後で、使えそうな建物が見つかりません。そこでトレラーハウスの利用を思いつきました。ハウス室内は思ったより暖かく、冬でも天気のいい日は軽装の子どもがいます。おおぞら保育園では、いま 19 名の子どもたちが手狭な室内や屋外で遊び、学び、

音楽が流れると子どもたちはデッキで踊ります。（提供・おおぞら保育園）

伸びやかな時間を楽しんでいます。全国からの被災地復興への温かい支援を得て、写真のように屋根のあるデッキもできました。いま願っているのは、屋内運動ができるスペースと、給食室つきの新園舎の実現です。

黒川　恵子
宮城県多賀城市おおぞら保育園・園長

■ CYR・CYK イベント案内

2014 年 1 月 25 日(土)より 4 月 27 日(日)まで
甦るクメールの至宝・ピダン絵絣展
（CYK 出展 14 点）

場所：カンボジア国立博物館一階、プノンペン
共催：ピダンプロジェクトチーム
協賛：東京倶楽部

2014 年 4 月 6 日(日) 18 時
花まつりチャリティーコンサート（北風と太陽）
武久源造　チェンバロ演奏

場所：百観音明治寺　東京都中野区沼袋 2-28-20
ゲスト：小林純子　「災害子ども支援ネットワークみやぎ」代表
カンボジア織物展：13 時より、百観音沙羅会館にて

■ 事務局からのお知らせ

2014 年 5 月 31 日(土) 15 時 30 分～ 17 時
幼い難民を考える会　活動報告会

場所：天風会館 1 階 102
東京メトロ有楽町線「護国寺駅 2 番出口」徒歩 1 分

■ 委託販売のおすすめ

カンボジア織物センターから届く、手織布や小物製品の販売をお願いできませんか。お問い合わせは、幼い難民を考える会 03-3943-6971 または info@cyr.or.jp 原 稔（はら・みのる）まで。

認定NPO法人 幼い難民を考える会 CARING FOR YOUNG REFUGEES

子どもたちの明日 109 号
発行日：2014 年 3 月 5 日　発行人：深水 正勝

特定非営利活動法人幼い難民を考える会
〒 112-0013　東京都文京区音羽 1-10-4 池田ビル 3F
TEL：03-3943-6971　FAX：03-3943-6973
E-mail：info@cyr.or.jp　URL：http://www.cyr.or.jp

幼い難民を考える会（CYR）は認定 NPO 法人です。
ご寄付は税制優遇措置の対象となります。